二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

百花繚乱
淫獄のサバイバル

小説 綾守竜樹
挿絵 影原半蔵

序章　四神選抜　007
第一章　生存試験、一日目　048
第二章　生存試験、二日目　113
第三章　生存試験、三日目　186

登場人物紹介

Characters

藤木(ふじき) 沙織(さおり)

藤木流鬼道忍所属の退魔くノー。退魔の淫術を修め、自らの肉体をもって魔を祓う。

二条(にじょう) 理香子(りかこ) レジーナ

全身に鎧を着ている聖鎧騎士団所属の祓魔師。イタリア人男性と日本人女性のハーフで、金髪、碧眼。潔癖な性格。

アーシュラ＝ハルシャヴァルダナ

科学的幽霊退治屋(コストナイパスター)と自称する科学者。通称アッシュ。インド人女性と日本人男性のハーフで、銀髪、金眼。享楽主義者。

王(おう) 美麗(みれい)

陰陽札法を駆使する職業的退魔屋。日中ハーフの男性と日本人女性との中国人クォーター。傲慢で協調性に欠ける。

『第一章　生存試験、一日目』より

間髪入れず触手が動き、尻たぶの弾力を愉しみ始める。バター色のふくらみはキスマークで埋められ、たくさんのイチゴを埋めこんだみたいになっている。性感帯だらけに改造されてからの愛撫は、お尻大の巨大クリトリスを弄られているのと変わりなかった。

「ひいッ、だめぇ！　やめてェ……！」早くも哀願の言葉を漏らしてしまった。「……そ、それ！　その吸盤だめぇ！」

胴の端っこを弄られているのに、眉間の奥までツーンとさせられる。

『だめ？　……ああ、吸って欲しい場所がちがうんだな』

「ち、ちがうッ、そうじゃないィ！」

『そうか、やっぱりちがってたかァ……』

淫魔は新たな二本を伸ばし、おののく両腕にも絡ませた。

自慢の手袋が、粘液を吸ってグジュグジュになった。魔の香りがする拘束衣になってしまった。美麗はそのまま吊りあげられ、なよなよの空中イスに座らせられた。力のない膝とだらしない股ぐあいが、女体を狩られた獲物に似せていた。

『……だよなァ、わざわざ編み紐にしているぐらいだ。ココがお好きなんだろ？』

尻たぶをネチっこく撫でまわしていた触手が、腰骨を越えて脇腹を撫であげる。ピチピチのドレスに悲鳴をあげさせ、編みこみを柔肌に食いこませる。美麗の叫びにもかまわず船尾から船首に向けて踏破し、汗みどろの腋窩をエグる。

「ひあぁッ、いやあぁッ！」

目玉の飛びでそうなくすぐったさの奥で、フラッシュのような性感が瞬いた。これもまた、人間の腋ナメなどお話にもならなかった。左右の触手は鎖骨を横滑りし、胸骨のあたりで衝突すると、美麗が泣きたくなるような動きを取った。

「だめ……おねがい……バスト……やめてェ……」

特に弱い部分ではない。むしろ、先端以外は鈍感だと言っても良い。

しかし淫魔の吸盤にかかれば、感度など関係ない。問題になるのはボリュームであり、そこにいくつのキスマークを遺せるかなのだ。触手はコマ回しの紐よろしく双乳に巻きつき、乳首を除いて隙間なく埋めつくす。美麗はドレスを着たままで全身、粘液まみれにされてしまう。

「……うひぃ、ひい……な、舐められ……ひいい……！」

性感帯ではない、と思っていた。

だが左右の乳房をすき間なく、文字通り一分の漏れもなく舐めつくされた経験がある女なんて、まずいないだろう。そして一度でも味わわされれば、「胸なんてジャマになるだけ。男を楽しませるための遊具よね」なんて言えなくなるはずだ。

快感がじわじわと浸透してきて、肺を蒸らす。吐息がどうしようもなく生臭くなる。殊に胸の谷間、下乳の付け根、乳輪の縁といった境目がたまらなかった。そこはまるで、先

の丸い針を刺されているようだった。官能の針は性感帯を突き、いまからこれを穿りかえして塊に変えてやるからな、と無言の脅迫をかけてくる。
『お、思ったよりもイイじゃねェか！　俺はこういう、肉の詰まったプリンプリンの乳って好きだぜェ……揉みしだいている、って実感できるからなァ』
オルガはどこから漏らしているのかわからない声で笑い、双乳に接したすべての吸盤を蠢かせた。女殺しの合唱隊は一糸乱れぬ統率を見せて、ほぼひとつの音を響かせた。
「……ひぃウぁあァ！」
双乳のあちこちにクリトリスが生えた。
実際には二まわりほど腫れあがっただけなのだが、美麗の脳内イメージにおける乳房は、ドリアンのようなイボイボだった。何千という性感の結節点から、眉間を火箸で掻きまぜるような快感がほとばしってくる。ひっきりなしに襲いかかってくる。
「アアア、アア……」
美麗は胸を反らし、生汗を滴らせた。
『……たまんねェなァ。やっぱり、一発目はココで極めておくかァ！』
淫魔が楽しげに、胸ぜんたいを揉みしだいてくる。舐めながら揉み、揉みながら吸い、吸いながら舐める。舌と手と口、人間が一時にはできない責めを何千人単位の人海戦術にして、さらには魔界ならではのキスマーク付きで仕込んでくる。

「アーッ、アーッ！　だめェ、だめえェーッ！　だ……アーッ！」
もう見栄も体裁もなかった。双乳から伝わってくる刺激は心臓を乗っ取り、全身の血流そのものをコントロールしていた。触手たちにギュッと絞られると、悦びで漂白された血が流れだして、手足の先まで痺れさせる。
何度めかの怒濤のとき、ついに限界を迎えた。喉の奥に架けていた閂が外れて、驚くほど大量の涎とともに肉の屈服宣言を轟かせてしまった。
「……アアアーッ！」
全身、特に女体の側面に波打つような痙攣が走る。無防備に開かれた膝が震えて、内腿の充血と股間の匂いを印象づける。野菜の水気を切るように首が上下して、こらえ切れなかった女の浅ましい顔が現れる。猛々しい印象のあった赤毛は、毛嚢から染みでた脂に包まれてベッタリと垂れ、いまだ震えの引かない頬に張りついている。
「アアア、アア……アアぁああ……」
胸だけで魂を抜かれた。
触手たちが美麗を休ませることなく、ドレスを谷間に寄せてくる。つまりは吸盤つきの舌に舐めこそがれ続けられて、胸イキした女は再び身をくねらせる。すでに丸出しの双尻を振り、やや扁平なヘソまで踊らす。
露になった双乳は、悪魔の外科手術のおかげで真っ赤な水玉模様になっていた。足、尻、

胸、いまの自分にはいったい、いくつの性感帯があるのだろう。
『……おい、この程度でグロッキーなんてカンベンしてくれよなァ』
両腕に巻きついていた触手がズルズルと滑り、胸の尖端に近づいてくる。すっかり牙を抜かれた美麗のなかで、今度は量ではなく「質」の恐怖が頭をもたげた。
あの吸盤責めを最初から性感帯の部分に施されたら、いったいどうなるのだろう？　それは性感の二乗、鬼人も逃げだすカーブを描くのではないだろうか。この触手はどうして、この高さにあるのだろう。どうして、どうして乳首のすぐそばでキュプキュプ音を立てているのぉ？
「……お……おねが……い……ゆるし……てェ……」
オルガは、とても優しい淫魔だった。
親指サイズの吸盤、小さな靴下のようにスッポリと被せられるものを用意してくれていた。美麗の乳首は根本や乳暈まで余すところなく、粘膜と筋肉のキメラに呑みこまれた。

※

沙織たちの能力は、割と融通が利かない。ある面に秀でていればいるほど、その他では劣ってしまいがちだ。
「……これでおしまい、と」

『第二章　生存試験、二日目』より

さなかに体位を変えられるのは致命的な失態であり、沙織がどれだけ乱されていたのかを間接的に明かしてしまった。

――こちら側の牝が、牝であることを辞められるはずなかろう。おまえが乱されずにすんだのは、未熟な連中ばかりを相手していたからにすぎん。あちら側には、我程度の性豪などいくらでもいるぞ！

沙織は起きあがろうとして両手首を握られ、顔の左右に縫いつけられた。小さく万歳しているような格好で腰を突きこまれ、荒々しく上下動させられた。

――……沙織……。

――ち、ちがう……ちがうの……本当に何でもないの、兄さんっ。

――残念ながら、おまえの兄にはそう見えていないようだぞ？

タメを利かせて突きぬかれた。膣天井を抉り、尿道を内裡から扱きあげる一撃だった。

――……あ！

亀頭や肉竿のもたらす快感は堪えたが、一歩遅れてやってきた陰嚢の体当たりは手に負えなかった。取りかえしのつかない失敗をしたときの脳が凍りつくような一瞬を経て、沙織は爪先を丸め、両目を固くつぶってしまった。

「女」の表情を浮かべてしまった。

――睦まずとも乳繰りあっていれば良い……おまえたちは左様にごまかしていたようだ

が、牡と牝をもっとも繋げ、悦ばせられるのは性交よ。女を捨てた？　術の道具？　笑わせるわ……不甲斐ない兄に代わって、我が真の悦びを教えてやろう。

本性を現した鬼が、哀れなくノ一を詰め将棋の的確さで追いつめる。崩れた女顔、悔しさと兄に対する罪悪感に憑かれたそれを睥睨しながら、肉竿の端まで使って抜き差しをくり返す。強く押しこんで女の下っ腹を折らせ、思いきり掻きだして小陰唇を外に捲れかえさせる。沙織の抵抗は、男の腰が振幅するだけで寸断される。

――……ッ……く、ふっ……う、くぁ……ぁ……ち……ちが……うのぉ……！

沙織は舌ったらずの声で訴えた。兄は絡みあう男女から眼を逸らしていた。正座の膝に置いた手を、固く握りしめていた。

――……に、兄さん……っ……！

乱れている、と思われてしまった。妹は慌てふためき、否定しようと充血した唇を開いた。その瞬間、鬼が怒濤の激しさで突きまくりだした。

――……あっ？　あああっ！

抑えに抑えていたものが押しだされた。

――だ、だめっ……あーっ！

熱く濡れた叫び声が、下っ腹から噴きあがってくる。止められない、いつものように封じておけない。沙織はのけぞり、白い喉首をさらして吼えた。口蓋の赤さを確かめられる

ほど大口を開き、膣穴から送りこまれる性の愉悦を吐きだした。
——ははは、何でもないのではなかったのか？
鬼は勝ち鬨とよく似た笑い声をあげて、削岩機のように男根を打ちつける。不感症だったはずのくノ一は膣感覚に翻弄され、兄以外に初めて女の悶えをさらしてしまう。
——……さお、り……。
兄は鬱血していそうな口調で呟き、犯し犯される二人を凝視した。いつもは柔らかな目が鋭く締まり、白目に赤い筋を走らせていた。
——見ないでぇっ！
自分を惨めにする台詞だ。そうわかっていても叫んでしまった。
——お願い、兄さん！　私を見ないで……！
乱れてしまう私を、兄さん以外の男に感じさせられてしまう私を、兄さんのものではない男根に精を遣らされてしまう私を見ないで。
私をそのような目で見ないで。
兄のそれは灼けただれて、暗い力を滾らせている。鬼への嫉妬、沙織への憤怒とかすかな侮蔑。おまえも、やはり「女」なのか。兄のなかで特別扱いされていた自分が、「その他大勢」と同じカテゴリに入れられ、抽象的な「女」に格下げされる。
——いやっ、だめ！　だめだめだめ……あーっ！

哀しみに胸を引きさかれる一方で、肩の荷が下りた。ずっと守ってきたものが、壊されてしまったのだ。兄に蔑まれてしまったのなら、もう「妹」を固守し続けても無意味だ。自分は生まれて初めて、妹という殻から解かれる。鬼のペニスに突きくだかれて、剥きだしの藤木沙織になれる。

——あーっ、あーっ！　……あああーっ！

沙織は子宮孔の歪みに合わせて獣声をあげ、薄桃色に染まった身をくねらせる。くノ一の責務と妹の気兼ねを失ったいま、胎内を掻きまぜられるのはすこぶる濃密な体験だ。他のなにものにもない充実した狂おしさを味わえる。

——ふふふ、愛しの兄に痴れ狂うさまをたっぷりと見てもらえ！

——そんなっ、い、いやあ……あーっ！

兄は下唇を噛みながら妹の痴態を見つめる。妹は牝の匂いふんぷんたる生汗を噴きださせて、嗅覚でも兄を刺激してしまう。寝取られた男は唇を噛みきって、真っ赤な血を滴らせる。

——あああ、ああ……兄さん！　兄さん、私っ！

兄の流した血が鮮やかで、あまりにも赤くて、沙織は魂の芯から震えさせられてしまう。異常な昂奮にとり憑かれて呆気なく達し、ふだんの自分なら決して口にしないような卑語まで漏らしてしまう。

――兄さんっ、私だめなの！　こらえられない……ま、またイッちゃう……。
――沙織！
――……兄さんっ、イク！　沙織、イクウッ！
鬼はくノ一の両手首を放した。左手をすばやく移動させ、扇状に広がっている黒髪をつかんで押さえにした。右手は忍服の襟に差しこみ、タテに切りさいて帯ごと解いた。すっかり腫れあがっていた双乳がビックリ箱の勢いでまろび出し、自らの量感と弾力を誇るように揺れた。谷間に溜まっていた汗は、ほかのどこよりも匂っていた。
――沙織ぃっ！
血を吐くような兄の叫びは、沙織の心を痛めつけ、魂をくすぐった。従順だった妹は娼婦の自由を手にし、その甘美さに意識を奪われた。嫉妬、侮蔑、牝あつかい。いままで向けられたためしのない激情を浴びせられて、どうしようもなく熱くなった。自分のなかにも巣食っていた牝が、待っていましたとばかりに燃えあがった。
――見ないで！　見ないで、兄さんっ！　何も言わないでぇ！
我ながら呂律が妖しい。涎まみれの懇願は、むしろその逆をねだっているようだ。もっと見て。兄さん以外の男をくわえてヨガる私に嫉妬して。兄さん以外にイカされまくるいやらしい私を蔑んで。私の名前を呼んで。ほかの男に寝取られて悔しい、と泣いて。私を裏切り者と詰(なじ)って！

――肉の裏切りは……ふふふ、気持ちよかろう？　裏切られた方も、隠すな隠すな、モノを勃たせているのだろうが……おまえたちの欺瞞がわかったか？

陵辱者は揺れはずむ双乳を右手で押さえ、乳頭を寄りあわせた。沙織の乳暈は大きすぎず小さすぎず、その美巨乳にぴったりの円だった。充血しても桜の花びらに似た淡い桃色で、焼きたてのホットケーキみたいな厚みが唯一、昂奮を告げていた。そのまんなかで屹立している乳首は、まさに摘まれるための造形物だった。クレヨンの太さ、指先と比べたくなる長さ、健気に見える尖りぶり。愛らしい小動物を見ているようで、つい手を伸ばして寵しみたくなる。

――ああっ？　む、胸はやめてっ！　そこは兄さんの……ふあああ！

鬼は右手の四本指を鉤状に曲げると、右の乳首を人差し指と中指の第二関節あたりで、左を薬指と小指のそれで挟んだ。片手で二つの急所を捕らえ、手綱代わりに引っぱった。

――い、イクッ！

兄に仕込まれてきた妹には、ひとたまりもなかった。

――乳首イク！　イクイクッ！　そ、それだめっ！　すぐイッちゃうからぁっ！

――果てるときは報せるのか……よく躾けてあるな、兄よ？

女の弱点を捕らえた男は、嗜虐の笑みを浮かべて双乳を責めたてる。乳首をグリグリと捻りながら、土台の紡錘を三角錘に引きのばす。桜色に染まった双娘は、脂肉感をたっぷ

りと滴らせながら伸びを打ち、男根の突きこみに合わせてその艶身を揺らす。摘みの乳首は痛々しいくらい潰され、乳暈まで渦を走らせる。

――うううっ……ご、ごめんなさいっ！　兄さん、ごめんなさい……イクゥッ！

股に胸を掛けあわされるのは、罪悪感と官能を結びつけられるのに等しかった。子宮孔から乳首から、快楽の奔流がひきもきらずほとばしってくる。沙織は絶頂とともにどこかへ翔んでいかないよう、両足で男の腰に絡みつき、両手で敷布を握りしめる。鼻のしたを伸ばしながら奥歯を噛みしめ、汗に濡れた顔をグチャグチャに崩れさせる。

――くあ、あああ……ごめんなさい……ごめんなさいっ！

兄に謝るのが、たまらなく気持ちいい。謝罪の言葉をくり返すたび、昂奮のあまり心臓がでんぐり返りそうになる。罪の苦しみではなく性の熱狂に押されて、沙織は目尻をあふれさせた。鬼の哄笑と兄の凝視は、覚醒めさせられた膣性感をさらに刺激して、随喜の涙まで流し始めた女を自虐の悦びにのめり込ませる。「ごめんなさい」と「イク」をセットにしてしまう。

――ははは、そちらの気まで起こしてしまったか……それは強い結びつきのように見えて、実際には決して交われぬ孤独の檻だ。兄と二人、性のすれ違いにもがき、肉の獄に堕ちるがいい。

鬼は刺決とばかりにストロークを速めた。沙織は叫ぶことすらできなくなり、ただ唇を

『第三章　生存試験、三日目』より

やがて尿の勢いが弱まり、ポタポタと滴るだけになった。淫魔はやっと触手を抜いた。理香子は腰をブルッとさせ、疲れきったように首を折った。

『……さァて、いよいよお待ちかねだ』

オルガはすべての触手を動かして、尻たぶを割りひろげた。脱力ぎみのそれは、爛れた量感を増していた。まだ血が滲みでている肌を撫でていると、理香子は突然、震えはじめた。

「……ひいっ、だめ……だめっ、だめえぇっ！」

幼女のおちょぼ口を思わせる肛蕾がムリュッ、と膨らんだ。秘密の赤みをさらした。粘りの強い体液が滴りおち、それを追いかけるように透明な粘体が滑りだしてきた。

――まあ！　まさか、こんなところで……？

美少女の排泄孔から中身が漏れてくるさまは、観衆たちの妖しい美意識を刺激してやまなかった。生き物のように蠢く粘膜と秘皺に食いつくような視線を当てて、理香子の羞恥心を刺激した。

「あむ、むむむ！　むむっ、むひぃ！　ひーっ！」

理香子にとっては、腸壁を擦られているのと同じだ。ヌメらかながらもザラつく魔性の肌触りが、おなかの奥から抜けおちる。強烈すぎる違和感が精神を攻囲し、まるで自分自身がこぼれ落ちていくような気にさせられる。

『なんだ、こっちにも先客がいたのかァ？　……放尿に続いて放糞プレイまでご披露とは、サービス精神満点だなァ』

長々と居残っていたヘルハンドは、競争相手に気づいたのか単に飽きたのか、芝生の緑に触れると消えた。淫魔はもっとも太い一本をヒクついている穴に当て、ヌメヌメの粘膜どうしを擦りあわせた。

「ひ……ぁ……ッ……！」

女祓魔師は頬を真っ赤にして、声を殺した。必死で気張らないと、恥も外聞もない声をあげてしまいそうだった。

度重なる屈辱に掻きみだされた心は、乾いた喉のように快楽を求めている。いまの理香子にとってもっとも気持ちよいのは、背徳の門を強引に貫かれ、身体の内側から神との繋がりを削られることだ。

触手が可憐な皺をすき、その姿からは想像もできない運動性能をひけらかさせる。粘膜が勢いよく伸び縮みする様子は、見る者に奇妙な爽快感と醜さを感じさせる。オルガは観衆の嘆声を引きだすと、肛門と吸盤を密着させて熱烈な接吻を見舞った。

「……ッ！　……こんな……ああ、だめになる……」理香子は両目を見開き、首を振りたくる。「わたくしのお尻が……悪魔のものに……されてしまう……」

『いまさらナニ言ってんだァ？』別離の音を立てて、『ココでイケるようになったら、悪

魔との契約完了だろ。神の秩序に仇なしているんだからよ』
「……それは……でも、わたくしは……わたくしの信仰は……」
『ションベンと一緒に流しちまったんだろ』
淫魔が触手の切っ先で、物欲しげに蠢く穴を突いた。一センチほど埋められただけで、理香子はすっかり顔つきを変えていた。唇の端から舌を垂らし、鼻のしたをだらしなく伸ばしていた。
ここまで蝕まれているとは思わなかった。
あちら側の仇敵、二度も切りきざんでやった相手に触れられているのに、泣きだしたいくらい気持ちいい。お尻が疼いて仕方がない。ここから湧きあがるあの感覚、魂が天に昇っていくような至福に包まれて、なにもかも忘れさりたい。
自らの意志を意志しない。主体性を殺そうとするこの傾向こそ、理香子の教派が患っているとされるマゾヒズムだ。その理屈、危険性はいやというほど感得できていたけれど、若き聖女は疲れきっていた。
とにかく、縋りつきたかった。外からやってくる力強いものであれば、自分の意志を求められないものであれば何でも良かった。そして女の身体は都合よく、それを味わえる。あれはそういうものだから、女たちを虜にする。
『……これからキッチリ躾して、ケツマ×コ持ちのマゾ牝に変えてやるからな！』

オルガは語尾に勝利感を響かせて、ニンジンの太さを潜らせた。直腸の濡れ襞を擦りたてて、S字の曲がり角を押した。

「……むーっ！」

理香子は強靭な拘束を振りきらんばかりに仰けぞり、ヘソからしたをモゾつかせる。あまりの勢いに胸当が跳ねて、充血しきった乳頭も飛びだしてしまう。まだ未熟な性器のなかでも二つの突起だけは女で、被虐の流し目を放っている。淫魔はもちろん心得たもので、自らの分身を双乳に絡みつかせて括りあげる。痛々しいくらい膨れあがった乳首に、触手の先端で鞭打ちを味わわせる。

「あむ、むむむ……お尻、キツい……胸、痛い……」

字面なら苦悶だが、口調は蕩けていた。女体のもっともしたから込みあげてくる悦びが、痛みの妖化粧を被せられて魂を溶かす酸になる。剥がれ、壊され、貶められてしまった心身には、なによりも染みわたる。お尻のなかで触手を掻きまわされたら、もう極まりだった。理香子は今日いちばん甲高く鳴いて、薄桃色の肌に汗を浮かばせた。

「……くる！　す、凄いのが……深いところからくる……くるうっ！」

天使の声で、屈伏を叫ぶ。時間刻みで熟れていく尻たぶを揺らして、肉感を撒きちらす。観客たちは歓声と拍手を浴びせて、新たな牝奴隷を迎える。

『……いきなりかよ……まあいい、何度でもイケよ。好きなだけイキまくって、俺サマの

モノしか考えられなくなっちまいなァ！』
　オルガも復讐相手を征服する悦びに、我を忘れて触手を繰る。責め手も受け手も自分を手放して、一方通行のエロスに溺れる。
「うむ、むむむ……ま、また……わたくし、また……またっ！」
『またイッたのか……どうだ、理香子。キモチいいだろ？』
「……あむっ、むむ……き……き、気持ちいい……」
　絶頂がもたらす前後不覚のせいで、理香子は朦朧としている。判断力もなにもない。ただこの状態、神の視線を気にしないでいられる時間のためには必要だと思って頷く。
『なら、叫べ』攪拌棒をより激しく暴れさせて、『腹の底から叫べ！』
「……気持ちいい……気持ちいい気持ちいい……」
　ああ、自分は正しい選択をしたのだ。
「……気持ちいい！」
　口にすればするほど、悦びも痛みも鮮やかになる。女祓魔師は新たな遊びを覚えた子どものように、魂の堕落を叫び続ける。
『もっとキモチよくなりたいかァ』
「なりたい……むむ、気持ちいい！　……気持ちよくなって、なにもかも忘れたい！」
『おまえのケツ穴が、マ×コになってもかまわないんだな？』

「いい！　き、気持ちよくなれるなら、なんでもいい！」
オルガはいったん触手を止めて、表皮の性具を蠢かした。腸壁のありとあらゆるポイントに吸いつき、吸盤だけが持ちうる粘膜と筋肉の凄みを味わわせた。
「……ひーっ！」
美麗を壊した性技だった。理香子は排泄の穴、必ず働かさざるをえない器官に「クリトリス」を作られた。マゾに片足を突っこんでいる娘にとって、その後の肛虐は甘美すぎる地獄だった。吸盤混じりで掻きまわされたら、ひとたまりもなかった。
「気持ちいい気持ちいい！　ひいっ、気持ちいいーっ！」
ここには神もいない。天地の別もなければ、時間の経過さえ判然としない。ただ粘っこい光が、女体のもっとも深いところから湧き続けている。手足の指先まで達して、なにもかも満たしてしまう。理香子は自分がどうなっているのかも理解できないまま、狂態をさらし続ける。まわりの女たちもあてられて、手淫や嬲りあいを始めている。
『ククク、躾の第一回めだ。最後は派手に飾ってやるよ……』
淫魔は足の痕を掲げて、霊線を利かせた。教会地下室の同時存在が、生贄の魂から絶頂を搾りだし、液状にして送ってきた。触手という触手にドロリとした光、理香子のなかをたゆたっているのと同じものが溜められた。
『……これこそ真の媚薬、浴びればどんなオンナもイッちまう……なにせ、エクスタシー

そのものだからな。外から塗りこまれるのも、また乙なモンだぜェ……』
吸盤という吸盤が、発射前の緊張感を孕む。触手の根本が独特のうねりを発し、先端めがけて内なる爆発を送りだす。吸盤が一瞬の硬直を挟んで、勢いよく弾けた。放射皺の奥から、まばゆい白濁をぶちまけた。
「……ッ！」
豪奢な金髪に、湯だったような赤い頬に白い粘りが降りそそぐ。未練がましく残った白銀の鎧に、鞭打たれ続けて腫れた乳頭に七人分の絶頂が降りかかる。自分のものだけでも充分すぎるのだから、理香子は声も出せずに狂った。肌から染みこんでくる悦びに、為す術なく翻弄された。
「……ッ！　……ンッ！　ふ……ッ……！　……ッ！」
さらに悪魔的な遅延をつけて、直腸内でも噴射された。白濁たちが淡雪よろしく消え始める寸前に、駄目押しとして注がれた。なかにぶちまけられたそれは本人のエクスタシーを醸して、危険な毒酒を作りだした。残りわずかな正気を酩酊させて、理香子の人格そのものに後遺症を与えた。
「……すごい……すごいぃ……いい……いいっ！　いいーっ！」
聖鎧騎士団初の女祓魔師。怒れる戦乙女。白き狂信。もっとも神を愛し、神に愛されていたはずの聖女は、このとき完全に消えていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/